

台湾情報誌

交流

2016年7月 *vol.904*

公益財団法人 交流協会
Interchange Association, Japan

台湾ニューシネマ? どんな映画?



交流

2016年7月
vol. 904

目次

CONTENTS

台湾ニューシネマ?どんな映画? 1 (戸張東夫)
「桂冠45年。老舗新意。」老舗食品ブランドの新事業開拓への挑戦 ～桂冠実業王正一董事へのインタビューより 8 (根橋玲子・福岡賢昌)
【台湾内政及び日台関係をめぐる動向(2016年5月下旬～2016年7月上旬)】 蔡英文総統の中南米訪問、沖ノ鳥島問題をめぐる紛糾18 (石原忠浩)
台北俳句会会長 黄靈芝先生を偲ぶ26 (杜青春)
交流協会事業月間報告30

※本誌に掲載されている記事などの内容や意見は、外部原稿を含め、執筆者個人に属し、公益財団法人交流協会の公式意見を示すものではありません。

※本誌は、利用者の判断・責任においてご利用ください。

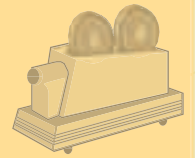
万が一、本誌に基づく情報で不利益等の問題が生じた場合、公益財団法人交流協会は一切の責任を負いかねますのでご了承ください。

● ● 交流協会について ● ●

公益財団法人交流協会は外交関係のない日本と台湾との間で、非政府間の実務関係として維持するために、1972年に設立された法人であり、邦人保護や査証発給関連業務を含め、日台間の人的、経済的、文化的な交流維持発展のために積極的に活動しています。

東京本部の他に台北と高雄に事務所を有し、財源も太宗を国が支え、職員の多くも国等からの出向者が勤めています。

台湾ニューシネマ?どんな映画?



ジャーナリスト 戸張東夫

台湾ニューシネマは、誕生してからすでに30年の歳月を経たが、その輝きは一向に失われることなく、いまも世界中の映画ファンに熱烈に支持されている。わが国にも台湾ニューシネマのファンは少なくないらしい。この(2016年)4月末から6月初めにかけて東京・新宿の映画館 K's cinema で「台湾巨匠傑作選 2016」と銘打って台湾映画23作品を集中上映したが、その中に台湾ニューシネマの作品が五つ含まれていた。また台湾ニューシネマの誕生30周年を記念して作られた新作のドキュメンタリー『光陰的故事—台湾新電影(台湾新電影時代)』(謝慶鈴監督、2014年)も公開された。このドキュメンタリーは台湾ニューシネマから受けた影響や、その魅力を世界各国の監督、評論家ら映画人に語ってもらい、それをまとめたもの。台湾ニューシネマの影響が極めて広範かつ深いものであることを改めて印象づけられた。

このドキュメンタリーでひとつ不満だったのは、肝心の台湾ニューシネマがどのような作品なのかに全くと言っていいほど触れられていないことである。インタビューに応じた映画人がわかっているならばそれでよしと考えているのであろうか。もっともこのドキュメンタリーに登場する映画人の中にも台湾ニューシネマについてよく理解していないのではないと思われるケースさえ散見された。こんな批判の声を予想していたかのように冒頭で台湾ニューシネマが生まれた背景を説明している。だがそれも申し訳程度のきわめて短い解説だし、台湾ニューシネマの美学について語ることもないピントはずれのもので、台湾ニューシネマそのものを詳しく知りたいという観客には全く

不十分に思えた。これでは台湾ニューシネマという言葉だけがひとり歩きしてしまうだろう。

世界中の映画ファンが支持する台湾ニューシネマとはどの作品で、どんな特徴があるのであろう?

* 『光陰的故事—台湾新電影』は第10回大阪アジア映画祭2015では『光と陰の物語:台湾新電影』というタイトルで公開された。

80年代台湾、映画不振で幕開ける

台湾の80年代は映画不振で幕を開けた。1970年代末から80年代初めにかけて台湾映画はファンからすっかりそっぽを向かれてしまった。映画館に足を向けても、抗日愛国映画や反共映画などの政策宣伝映画でなければ、香港映画の後追いのカンフー映画か犯罪映画、あるいは恋愛映画しか選択肢がなかったのだから無理もない。こんな現実離れの夢物語に台湾のファンは辟易していた。これでは映画を観る気にはとうていなれないであろう。

だが実は台湾の映画界は30年前からこの種の作品をせっせと世に送りだしていたのである。そんな映画でもファンを満足させることが出来た時代もなかったわけではない。ただ80年代にはもはやそのようなやり方は通用しなくなってしまったのである。台湾の映画ファンは、あるいは意識していなかったかも知れないが、何か新しい映画を求めていたのではあるまいか。そういう時代になったということかもしれない。

台湾の映画不振にはまた別の背景もひそんでいた。テレビとビデオ機器の普及である。台湾ではテレビは60年代に始まり、70年代に入って映画

の強力なライバルとなった。さらに80年代にはカラー化が進み、報道番組やドラマなども充実してきて、映画を脅かし続けたのである。またビデオ機器が普及すれば、好きなときに好きな場所で映画を観ることが出来るのだから、映画ファンの映画鑑賞の態度を変えてしまう。人々の映画館離れは避けようもない。

1981年の台湾におけるビデオ機器の普及率は3・5%、またこの年の映画観客数は延べ2億5千万人だったが、1984年になると、ビデオ機器の普及率は14.22%、映画観客数は延べ1億3千5百万人となり、ビデオ機器の普及率は81年の約4倍に増えたのに対し、映画館客数はほぼ半減してしまったのである。このような人々の映画離れは決して台湾だけの現象ではないのだが、映画産業の規模が小さいだけに、台湾では影響が大きかったであろう。

「1982年下半期にはすでに、少なからぬ数の映画製作会社と配給業者が閉店休業といった状態で、景気の好転を待ち望んでいた。興行収入は減少する一方で、映画の製作本数が激減するに伴って配給業者の仕事も無くなり、映画の取引ができなくなってしまった。」などという映画業界の悲鳴に似た声が当時新聞で報じられたりした。

政権党である中国国民党が経営する台湾最大の映画製作配給会社中央電影事業公司(略称 中影)は台湾映画を管理、指導する立場にあるだけに、事態を深刻に受け止めていた。これまでとは異なる何か新しい作品が求められていることは分かっていた。だがそれがどんなものなのか皆目見当がつかなかったのである。

❶ 低予算、小作品、新人監督で新たな試み

中影はそこで映画とは畑違いの若い作家たちを企画部に招き、従来の映画とは全く異なる映画を

作ることを要請した。中心になったのは流行作家として活躍していた呉念真と小野であった。呉念真はその後シナリオライターに転じ、台湾ニューシネマには欠かせぬ人材となったことはよく知られている。それはともかく呉念真らはまず有名な作家の作品を映画化することを提案した。学生やインテリが台湾映画を観ないことはわかっていたので、こういう人たちにも観てもらうためには作家や作品の名声に頼るのも一つの方法と考えたのである。呉念真らは黄春明、陳映真、楊青矗らの作家の作品を考えていたのである。だがこの提案は実現しなかった。

その後テレビで活躍している新人監督の作品を観たのがきっかけで、経験のない新人監督のほうに何か新しい作品を作ることが出来るかもしれないと考えるにいたった。60年代の台湾映画の黄金時代に映画を志して海外留学した青年たちが当時相次いで台湾に帰ってきたことも念頭にあったに違いない。当時帰国した者の中には楊徳昌、柯一正、萬仁、李祐寧、曾壯祥ら後に著名な監督になった青年たちの名前もあった。いずれも米国留学組みである。

中影は新人監督に任せることに不安がないわけではなかったものの、低予算、小作品という条件付きでこのアイデアを受け入れた。そこでためし



『光陰的故事』の第二話「指望」(楊徳昌監督)

に陶徳辰、楊徳昌、柯一正、張毅の四人に、一本のオムニバス作品を撮ってもらうことになった。こうして生まれたのが台湾ニューシネマの記念すべき最初の作品『光陰的故事』である。1982年のことである。

台湾の普通の人々が成長の過程で味あう喜びや悲しみをスケッチ風な軽いタッチで描いた四つのエピソードを組み合わせた作品で、台湾社会の変化を映し出しているところに工夫が感じられた。たしかに従来のドラマチックな映画とは違うが、とくに出来のいい作品とも思えなかったのだが、予想に反して好評で、興行成績も悪くなかった。

これに気をよくした中影は低予算、小作品で新人監督に任せるという方針で引き続きカメラマンだった陳坤厚監督の『小畢的故事（少年）』（1983年）と侯孝賢、曾壯祥、萬仁3監督によるオムニバス映画『兒子的大玩偶（坊やの人形）』（1983年）を製作したのである。『少年』はタイトルにある小畢（シアオピー）という名の少年の成長過程を外省人と呼ばれる戦後中国からやってきたひとと、以前から台湾に住む本省人とのギクシャクした関係を背景に語った。また『坊やの人形』は1970年代に広く読まれた郷土文学を代表する作家黄春明の三つの作品を3人の監督がそれぞれ独自の姿勢で映画化した。1960年代の台湾庶民の生活に焦点を当てながら、台湾の生活の貧しさ、台湾人の遅れた考え方、戦後日本の経済侵略などを告発している。

この二つの作品も好評かつ興行的にも成功であった。とくに『少年』は1983年の金馬獎で最優秀劇映画、最優秀監督、最優秀脚色の3獎を独占したばかりか、同年の台北市の興行成績ベスト9の快挙を達成した。これら三つの作品で新しい映画は台湾の映画ファンに認知され、台湾ニューシネマと呼ばれることになるのである。またこれらの作品の成功を横目で見ながら民間の映画会社も『海灘的一天（海辺の一日）』（楊徳昌監督、1983



『坊やの人形』の第一話（侯孝賢監督）

年）、『看海的日子（海を見つめる日）』（王童監督、1983年）、『油麻菜籽（嫁ぐ日）』（萬仁監督、1984年）など同種の作品を競って製作したことから台湾ニューシネマは80年代前半の一つの潮流となったのである。

● どの作品が台湾ニューシネマ？

だがこの潮流も80年代半ばまでだった。この頃になると台湾ニューシネマは地元台湾のファンにも厭きられてしまった。「台湾ニューシネマはどれも似たような作品だから、一つ観れば沢山だ」といった厳しい声もささやかれ始めた。85年には地元紙の台湾ニューシネマ批判をきっかけに、観客無視の芸術映画がいいのか、それとも観客の好みに合わせたエンターテインメントがいいのかという論戦が地元のマスコミを舞台に展開されたりした。台湾ニューシネマは観客無視の芸術映画とみなされたのである。台湾ニューシネマの観客は激減し、興行成績は下降線をたどった。こうなるとどこの映画会社も新人監督に映画を撮らせてくれなくなり、ついに台湾ニューシネマは台湾の

(別表)

台湾ニューシネマ全作品

1) 台湾ニューシネマ (34 作品)

製作年	作品名 () 内は邦題	監督	製作会社
1982	『光陰的故事』 第二話 「指望」 第三話 「跳蛙」 第四話 「報上名来」 『野雀高飛』	楊徳昌 柯一正 張毅 張毅	中影 佳誉影業
1983	『兒子的大玩偶 (坊やの人形)』 第一話 「兒子的大玩偶」 第二話 「小琪的那頂帽子」 第三話 「蘋果的滋味」 『風櫃来的人 (風櫃の少年)』 『海灘的一天 (海辺野一日)』 『看海的日子 (海を見つめる日)』 『小畢的故事 (少年)』 『帶劍的小孩』 『竹劍少年』	侯孝賢 曾壯祥 萬仁 侯孝賢 楊徳昌 王童 陳坤厚 柯一正 張毅	中影、三一 萬年生 中影、新藝城 蒙太奇 中影、萬年生 新藝城 三一、高達
1984	『冬冬的假期 (冬冬の夏休み)』 『策馬入林』 『小爸爸的天空』 『我愛瑪莉』 『油麻菜籽 (嫁ぐ日)』 『霧裡的笛聲』 『玉卿嫂 (悲しい愛)』 『童年往事 (童年往事一時の流れ)』	侯孝賢 王童 陳坤厚 柯一正 萬仁 曾壯祥 張毅 侯孝賢	萬寶路 中影 三一 金海 萬寶路 中影 天下 中影
1985	『青梅竹馬 (幼馴染)』 『陽春老爸』 『結婚』 『最想念的季節』 『超級市民』 『殺夫 (夫殺し)』 『我這樣過了一生 (ある女の一生)』	楊徳昌 王童 陳坤厚 陳坤厚 萬仁 曾壯祥 張毅	萬年生 萬寶路 飛騰 中影 新藝城、龍祥 湯臣 中影
1986	『戀戀風塵 (恋恋風塵)』 『恐怖份子 (恐怖分子)』 『流浪少年路』 『我們都是這樣長大的』	侯孝賢 楊徳昌 陳坤厚 柯一正	中影 中影 飛騰 中影

	『我們的天空（淡水行き最終列車）』 『我兒漢生』 『我的愛』	柯一正 張毅 張毅	飛騰、新船 三一、中影 中影
1987	『尼羅河女兒（ナイルの娘）』 『稻草人（村と爆弾）』 『桂花巷（桂花小路）』	侯孝賢 王童 陳坤厚	學甫 中影 中影、嘉禾、學者

（『光陰的故事』と『兒子的大玩偶』はいずれも一作品とみなす）

2) 台湾ニューシネマに似た作品 (24 作品)

1982	『光陰的故事』第一話「小龍頭」	陶徳辰	中影
1983	『老莫的第二個春天（老兵の春）』 『台上台下』	李佑寧 林清介	高仕 新藝城
1984	『單車與我』 『安安』 『小逃犯（ある日の騒動）』 『不歸路』 『在室男』 『嫁妝一牛車』	陶徳辰 林清介 張佩成 張蜀生 蔡揚名 張美君	星達 群龍 中城 蒙太奇 飛騰 蒙太奇
1985	『國四英雄傳』 『唐朝綺麗男』 『竹籬笆外的春天』 『玫瑰玫瑰我愛你』 『台北神話』 『孤戀花』 『少年阿辛』 『在室女』 『人間男女』 『莎啞娜拉、再見（さよなら再見）』	麥大傑 邱剛健 李佑寧 張美君 虞戡平 林清介 張美君 邱銘誠 邱銘誠 葉金勝	龍祥 新風格 湯臣 蒙太奇 飛騰 新藝城 蒙太奇 印象 松慶 印象
1986	『父子關係』 『慈悲的滋味』 『暗夜』 『孽子』	李佑寧 蔡揚名 但漢章 虞戡平	中影 群龍 豊年 群龍
1987	『白色醉漿草』	邱銘誠	鴻泰
1988	『怨女（恨の館）』	但漢章	中影

（陶徳辰の『光陰的故事』の第一話「小龍頭」は一作品と数えていない）

* 台湾ニューシネマの分類、分析は戸張東夫、廖金鳳、陳儒修『台湾映画のすべて』丸善、2006年を参照されたい。

映画界から姿を消してしまったのである。

それでは台湾ニューシネマの最初の作品である『光陰的故事』が82年に作られてから、80年代半ばまでの数年間に作られた台湾ニューシネマの作品はいくつで、どの作品なのであろう。これをいうのはなかなか難しい。もともと台湾ニューシネマの概念が明確でないうへの作品を台湾ニューシネマとみなすのかについても映画監督や映画評論家、研究者によって多少意見の相違がうかがえるからである。そのような問題を考慮したうえで、映画研究家の陳儒修国立政治大学傳播学院副院長の分析をここで紹介しておきたい。陳儒修氏は台湾ニューシネマの作品は1982年から1988年の7年間に作られた58本とし、さらにこの58作品を「台湾ニューシネマ」と「台湾ニューシネマに似せて作った作品」に分類し、前者を34本、後者を24本とし、作品を列挙している。(別表参照)

台湾ニューシネマ一覧表を見ると、台湾ニューシネマの製作に携わったのは楊徳昌、柯一正、張毅、侯孝賢、曾壯祥、萬仁、王童、陳坤厚の八人の監督である。この八人が台湾ニューシネマの担い手である。前述のドキュメンタリー『光陰的故事—台湾新電影(台湾新電影時代)』も台湾ニューシネマの担い手たちの作品を紹介してはいるのだが、詳しい説明抜きに数カットを映し出すだけで、ほとんど印象に残らない。ところが楊徳昌と侯孝賢の二人については、台湾ニューシネマの時代より後の作品まで詳しく紹介するという風で、知らない観客が観たら台湾ニューシネマとはこの二人の監督の作品のことかと誤解してしまうであろう。気になるところである。

台湾ニューシネマに似た作品というのが24作品並んでいるのは何となく笑いを誘う。台湾ニューシネマの稼ぎがいいということから、これにあやかろうという便乗組みの作品群だろう。ある映画が“当たる”と、他の映画会社が競って似たような二番煎じ、三番煎じの作品を作るとい

台湾映画界の悪習が残っていたのである。

台湾ニューシネマは82年から88年にかけて58作品作られたが、同じ時期に作られた台湾映画は656作品(台湾ニューシネマも含む)だから、台湾ニューシネマはこのうちのわずか9%弱に過ぎない。それにもかかわらずかくも長い年月内外のファンに愛され、高く評価されているのには驚かされる。

● 強い台湾意識、全作品に

それでは一体どのような映画なのか? 台湾ニューシネマの特徴は多くの研究者や評論家によって論じ尽くされた感が無きにしも非ずだが、それらを踏まえて筆者なりに以下にまとめておこう。

強いリアリズム志向をまず指摘しておこう。台湾ニューシネマの監督たちは、作り物のドラマや現実逃避型の夢物語に辟易していたからいずれもリアリズムの作品を作ろうと考えていた。しかも名もない市井の小市民たちを主人公にした作品にしたいのだった。普通の人々の普通の生活をありのままに映し出すことを望んでいた。台湾ニューシネマの監督たちがリアリズムにこだわったことは、当局に禁じられた台湾語も必要な場面では敢えて使用する、プロの俳優は極力使わず、素人を起用する、セットより実景を好み、ロケを重視し、自然光を多用するなどの手法を駆使したことによく現れている。

もう一つは、主題、テーマを際立たせないことだ。テーマがないのではない。テーマを画面の奥に潜め、テーマを中心にドラマを組み立てるようなことはしなかったのである。実際にはテーマがいくつも潜ませてあり、観る角度によってさまざまに解釈できるというケースがしばしばだった。「何を言いたいのかさっぱり分からない」という厳しい批判を受けることもないわけではなかつ

た。陳坤厚の『少年』、侯孝賢の『童年往事—時の流れ』などがいい例である。

映画を多くの観客に観てもらおうという考え方が乏しかったのも特徴の一つに数えておく。観客に厭きられた映画を再生するために台湾ニューシネマが登場したのだから、観客の好みや、レベルについて考えないはずはないのだが、なぜか台湾ニューシネマの監督たちはその辺のことには無頓着で、ひたすら自分の作品に没頭し、観客のことを全く気かけなかった。このため叫好不叫座（いいけれどつまらない）といわれ続けたのだが、これが結局自分の首を絞めることになるのである。

これらの特徴は台湾映画ファンのいわば共通の認識であり、筆者も異論はない。だが、台湾ニューシネマを、それを生み出した台湾社会の動向と二重写しにして見ると、また違った光景も見えてくるのではあるまいか。たとえば台湾ニューシネマの諸作品に共通する台湾意識はどうであろう。

台湾は1949年中国大陸から来た国民党政府に占拠され、中華民国に変わった。台湾は中国に、台湾人は中国人になり、中国語を使うことを強要された。台湾語は禁止され、台湾の歴史も、文化も、伝統もすべて否定されてしまった。戦後中国からやってきた外省人と呼ばれる中国人と、以前



『ある女の一生』（張毅監督）

から台湾にいる本省人（台湾人）とのエスニックグループ同士の矛盾や対立感情も台湾に押し付けられた副産物であった。台湾人はこの状況に不満を抱いており、つねづね“台湾の台湾化”を強く望んでいた。これが台湾意識である。だが武力で押さえつけられていたため、それを公然と表に出すことはできなかったのである。

ところが70年代以後、国民党政府の弱体化や反政府勢力の台頭などを背景にこの台湾意識が強まり、政治面でも、文化面でも台湾アイデンティティ回復を求める動きが表面化してきた。この潮流は台湾人の政党民進党の結成（1986年）、戒厳令の解除（1987年）、蔣経国総統の死去に伴う初の台湾人総統李登輝の誕生（1988年）へと発展し、それから28年後の今年（2016年）1月の選挙により民進党の蔡英文主席が総統に選ばれ、さらに立法院（国会）で民進党が史上初めて過半数の議席を獲得、国民党をおさえて第一党に躍進するという結果をもたらし、台湾意識をほぼ完全なまでに回復することができたのである。だがこの台湾の現状は80年代の台湾では夢か希望にすぎなかった。

台湾ニューシネマは1982年この台湾意識の盛り上がりの中でスタートしただけにどの作品にも強烈な台湾意識が感じられるのである。当局に使用を禁止されていた台湾語を映画の中で多用したのがその一例である。しかも台湾意識がこのように公然と映画に盛り込まれたのはこれが初めてである。もし台湾ニューシネマの諸作品に共通点があるとすれば、この台湾意識をはずすことはできない。この台湾意識こそ台湾ニューシネマを台湾ニューシネマたらしめている最大の特徴なのだ、筆者はあえていいたいところである。

だが台湾ニューシネマ生誕30周年記念のドキュメンタリー『光陰的故事—台湾新電影（台湾新電影時代）』は台湾ニューシネマの台湾意識には全く触れていない。（了）

シリーズ台湾トップ企業経営者へのインタビュー

「桂冠 45 年。老舗新意。」
老舗食品ブランドの新事業開拓への挑戦
～桂冠実業王正一董事へのインタビューより



亜細亜大学アジア研究所嘱託研究員 根橋玲子
法政大学グローバル教養学部准教授 福岡賢昌

桂冠実業(股)有限公司 (Laurel Enterprises Corporation 以下、桂冠) は、冷凍食品を中心とした加工食品や調味料等の製造販売を行う台湾大手総合食品メーカーである。元董事長で現董事である王正一氏が1970年に創業し、1980年代には、「魚餃(魚のすり身餃子)」を中心に、台湾冷凍食品のトップブランドとなった。桂冠は「桂冠45年。老舗新意。」(45年の歴史がある老舗が、新しいアイデアを生み出す。)を社是とし、創新(イノベーション)・認真(一意専心)・負責(責任感)を経営理念とした家族企業である。

創業者で一族の長男である王正一氏が董事長を退任した後は、桂冠発展の要所である食品工場を専門に管理していた二男の王坤地氏が董事長を務めた。しかし、2014年に王坤地氏が急逝したため、現在は中国市場の桂冠ブランド発展に尽力し、上海工場長も務めた三男(上海在住)である王坤山氏が、董事長を務めている。

＊桂冠実業のスタートは氷売りから

創業者の王正一董事によれば、桂冠の原型は、王氏の父母が営む氷売りである。当初は天秤で氷や氷製品を主に販売していた。しかし、1960年代に入り、台湾の所得水準が上昇すると、氷売りのビジネスは成り立たなくなった。当時、王董事は薬品関係の企業に就職し、広告関係の仕事をしていましたが、王氏の父親が体調を崩したため、家業を手伝って欲しいと言われていた。しかし、王董事自身は、氷売りのような伝統産業では、事業継続が難しいと感じていたという。

桂冠実業のコア技術である冷凍技術は氷の製品管理でノウハウを取得しており、当時零下30度の冷蔵を可能とする倉庫を有していた。このノウハウを活用し、鍋種で一番人気があった凍豆腐(ドンドウフ)の製造も行っていったという。氷売りは夏のビジネスのため、冬場は商売にならない。そ

表1：桂冠の会社概要

企業名	桂冠実業(股)有限公司 (Laurel Enterprises Corporation)
所在地	台北市羅斯福路三段126号
業種	冷凍食品、調味料等の製造販売
代表者	王坤山 董事長
創業	1970年8月
資本金	7.16億元
年間売上	25億元
従業員数	700名
URL	http://www.laurel.com.tw

出所：同社資料を参考に作成



図1 当時の家族写真(父母を囲んで写真右より、王正一董事、故王坤地氏、王坤山董事長、王正明總經理)

出所：同社プレゼン資料より抜粋

のため、豆腐屋から豆腐を購入し、凍らせることで商品化したのである。なお、同じ鍋種ということで、当時はすり身製造も、父母の時代から行っていた。

桂冠は4人の兄弟によって支えられてきた。先述したように長男は創業者の王正一董事、次男は昨年亡くなった桂冠前總裁の王坤地氏である。三男は現董事長で上海工場のトップ王坤山氏、四男が現在の総経理である王正明氏である。

1968年、28歳の時、父親からの要請により、王董事が事業を承継することとなった。当時、王董事は、日本製の冷蔵庫を見て、時代の著しい変化を感じ、危機感を覚えたという。そのため、従来の氷ビジネスだけでなく、より付加価値が高いビジネスを行う必要性を感じ、台湾全土を回り、新事業の可能性を探った。

* 新事業のヒントは大阪万博にあり ～創業に至る経緯

1970年3月に大阪万博が開催されると、王董事は早速、来日し、足を運んだ。万博で営むレストランに入った際、500人ぐらいの収容施設で、来場者の食事を賄っているのは、「セントラルキッチン」方式であることが分かった。そして、収容施設の全体の5%に満たないスペースでキッチンを設定し、そこで料理したものをお客様全員に供給するというイメージが頭に浮かんだ。来日中は大阪の冷凍工場にも足を伸ばした。その工場では、魚の前処理を行っていた。これは劣化を防ぐために行っているもので、まさにレストランで行うのと同じ作業であった。さらに日本のもち米などを使ったデザートもヒットするのではないかと感じたのもこの時である。

王董事は、その後、台湾に戻り、早速新しい事業計画を練った。そして、ちょうど兵役から戻った弟の王坤地氏と一緒に桂冠を設立した。1970

年、つまり、万博の開催年のことである。しかし、当初、経営は順調とはいえなかったという。なぜなら、当時日本の技術が優れていたが、こうした最新の冷凍技術を取得するには資金が足りなかったからである。さらに、台湾では、特に食品の中でも冷凍食品関係の法律は厳しく、製品開発の道は思いのほか険しかった。実際、当時の台湾FDA¹の基準は厳格であり、冷凍食品工場を設立する規定も相当厳しかったという。また、GMP規則²も定められていなかった。代わりに台湾独自の法律があり、衛生基準については行政からの指導に基づいていたのである。二人はそれらに対応し、何とか基準をクリアした。さらに、冷凍食品会社の独自基準があったため、こちらも順守しなければならなかった。ただ、幸運にも、先代の時代から、冷凍関係の事業を行ってきたノウハウがあったため、困難に直面しながらもなんとか事業を継続することができたという。

* 日本時代の鍋料理をヒントに製品 開発を行う～事業拡大期

最初に開発したのは魚餃(魚のすり身)である。万博から帰国後に、試しに魚のすり身で皮をつくってみたところ、思いのほか、市場に歓迎され、売上の向上につながった。その理由は当時の台湾人に最も受け入れられる料理だったからである。また、王董事が、冷凍食品分野に参入した理由は、鍋料理のビジネスが将来的に発展していくであろうことを確信していたからである。1949年に国民党が台湾に来た際、中国大陸から多くの人

¹ 台湾の厚生労働省にあたる行政院衛生福利部 (Ministry of Health and Welfare) を称して、TFDA または台湾 FDA と呼ぶ。

² Good Manufacturing Practice の略称で、医薬品や食品などの製造管理および品質管理に関する基準として、規制当局が策定する品質管理規則。



図2 桂冠魚餃

出所： 筆者撮影

が来たが、様々な特徴ある中国大陸の料理もまた、入ってきた。例えば、山東省からは餃子、福建省からは魚料理といった具合である。現在、台湾料理には多くの異なる種類の料理が存在するが、中国各地からの腕の良い料理人を蒋介石が連れて来たためとも言われている。

戦後間もなくは、今の台湾にあるような伝統市場は存在せず、西門町の市場が出来たのは1970年頃になってからである。そして市場のレストランに台湾製の小型冷蔵庫が置かれ出したのが、同社が魚餃を開発した2年後の1974年のことである。王董事は、「当時アメリカ軍は台湾に駐在しており³、軍の兵隊たちは冷蔵庫を使っていた。台湾にはまだ一般の家庭に冷蔵庫が普及していなかった。そのため、台湾の冷蔵庫メーカーは、米国からその技術・ノウハウを得たのではないか。」と語る。

1974年頃より小型冷蔵庫の普及にともない、同社製造の冷凍食品も市場を拡大し始めた。当初、

販売した製品は、一般消費者向けでなく、レストラン向けの業務用であった。というのは、一般の家庭に冷蔵庫はなかったからである。しかし、これが同社の想定したセントラルキッチン方式の先駆けとなった。

後に、セントラルキッチン方式を、レストランからの要望で徐々に行うようになったが、現在のようスーパーなどへの小売りはもう少し後になってからである。というのは、スーパーは荷卸しなどの知識がなく、レストランの方が冷凍製品の扱いや売上のやり方をよく理解していたからである。

* 冷凍食品のトップシェア企業に～ ニッチ市場を確保し消費者向け 製品を拡充

同社が1970年代に鍋種でのトップシェア企業となった主な理由は何だろうか。それは、1) もともと台湾の鍋料理は野菜が多かったため、競合する同業他社が少なかったこと（すき焼きやおでんは日本時代からあったため、台湾人は魚のすり身や肉が入る鍋料理になじみはあった）、2) 冷凍食品自体はまだ少なかったこと、である。しかし、当時の台湾はいわゆる専業主婦が多く、彼らは主に各家庭で料理をするため、当該事業の先見性は高いと思われたものの、極めてニッチな市場であったと言えるだろう。

1970年以降、同社は右肩上がり業績が向上した。しかし、その売上に拍車がかかったのは、一般消費者の収入増加が著しかった1980年代以降のことである。この頃より市販用が増え、スーパーなどへの販売量も増加した。2016年現在の業務用と市販用の販売の割合はそれぞれ4割、5割強である。1981年には他社に先駆けて、消費者意見室を設立し、広く消費者の声を反映できる社内体制を構築していたことも、現在市販用の販売

³ 台湾と米国との関係は、戦後援助である「美援会」、朝鮮戦争を機にしたアメリカ合衆国の軍事顧問団(MAAG)駐在(陽明山)、ベトナム戦争を機にした台中に米軍顧問団が常駐(1963年)などの史実があることが、国立中央図書館「アメリカ合衆国の足跡」展示物など米国側資料により明らかにされている。

が業務用を上回っている理由であろう。

なお、同社製品の製造は、オートメーションで行っているが、食品製造はステップバイステップ（段階的かつ着実に）でやっていかななくてはならない。そのため、画一的なライン設計ではなく、自社で製造ラインを開発し、食品機械設計も同社独自で行っているという。製造・販売は台湾域内のみだったこともあり、日本企業との接点は全く無かった。実際、日本とは商品ラインナップが異なり、製造技術も異なるため、技術支援も受けていない（2016年現在、一部食品製造機械は、日本企業から調達している。）。

*食の安心・安全とコンプライアンス順守が追い風に～ピンチをチャンスとする

食の安全に関して、同社は早くから衛生管理を重視してきた。例えば、1989年自社工場でCAS認証を獲得、1999年に冷凍調理食品では初のHACCP認証を獲得している。また、2001年にはERP企業資源計画システムを、2004年には食品安全統制システムを導入し、経営の透明化及びコンプライアンスを順守してきた。

ここ数年で発生した食品問題（毒油問題）について伺ったところ、「食品業界全体の余波を受けて多少の影響はあったが、当社は素材の吟味とトレーサビリティを重視しているため、迅速な対応と消費者への情報開示が可能であった。そのため、一連の騒動で多くの食品メーカーが重大な影響を受けたが、当社にはほとんど影響はなかった。」という。王氏は、「仮に何か問題が起こった場合でも、これまでの長いノウハウと経験の蓄積により、迅速に原因を追究・確認をすることが可能であり、台湾FDAに報告できる体制がとられている」と自負する。

*食の安心・安全とコンプライアンスが追い風に～新事業である食品サービス業への転換

新市場の獲得についても同社は熱心である。1995年には上海世達食品公司を設立し、三男で現董事長の王坤山氏が中国に駐在しながら、事業を拡大させた。また、同社は食品の製造販売への事業拡大を目指し、2005年には自社を「食品サービス業」と定義し、桂冠発展の要所である食品工場を専門に管理していた二男の王坤地氏が董事長を務めることとなった。しかし2014年に王坤地氏が急逝したため、中国市場の桂冠ブランド発展に尽力し、上海工場長も務めた三男（上海在住）である王坤山氏が、急遂同社の董事長を務めることとなり、現在に至っていることは先述したとおりである。なお、同氏が注力してきた中国現地法人である「上海世達」は長男の王鈺寧氏に託された。

また、同社の新事業の一つとして「コールドチェーン事業」があげられる。2008年には桂冠のグループ企業である「世達流通公司」が設立された（2016年現在、台湾内に冷凍設備がある営業所は10ヶ所〈台北、桃園、新竹、台中、嘉義、台南、高雄、屏東、花蓮、宜蘭〉）。また、2012年には、



図3 中国拠点の分布

出所：同社プレゼン資料より抜粋



図4 桃園八徳低温物流中心-好食在公司
出所：同社プレゼン資料より抜粋

得意先である統一セブンイレブンのコールドチェーン対応を行う「桃園八徳好食在低温物流中心-好食在公司（桃園低温物流センター）」が設立された。次男の王坤地元董事長は、桂冠の工場管理を一貫して担ってきたが、物流事業については、既に彼の長男に引き継いでいた。その「物流事業」を継承したのが、現「好食在公司」董事長の王東旭氏である。その後、台北・台中、台南にも配送・貯蔵センターが設置され、今では台湾全土に、同社のコールドチェーン網が拡大している。冷凍設備はスウェーデン製であるが、同様の冷凍倉庫を中国大陸にも造成する予定があり、中国でのコールドチェーン事業にも意欲を見せている。

2010年には実験厨房（テストキッチン）が設立され、同社とシェフとのコラボ企画や共同研究開発のプラットフォームが立ち上げられた。また、2013年には、グループ企業である艾琳農坊（アイリーンズ・ファーム）が設立され、現在では、同社製品の通販事業をインターネットやSNSを活用しながら、情報発信を積極的に行っている。さらに、2014年に桂冠窩厨房（ローレル・クッキングスタジオ）が落成した。そこでは、桂冠製品を活用した有名シェフによる料理教室が人気を博している。

*ブルーオーシャンを求めて～新規事業マーケティング戦略を王鈺婷マネージャーに聞く

今回のインタビューでは、創業者で一族の長男である王正一董事、台湾における営業販促、市場開拓を担当する四男の王正明總經理、そして王總經理のご令嬢で、桂冠の顔となる広報マーケティングと販売促進を担当する王鈺婷（sabrina）マーケティング課長（以下、王課長）にご対応いただいた。

王課長は、米国に3年間留学し、グローバルマーケティングを学んだ後、現在、同社の商品マーケティングと桂冠窩厨房（ローレル・クッキングスタジオ）を担当している。また、若い世代を中心にした、ブログやSNSでの情報発信も行っている。王課長は、製品ラインナップごとのマーケットセグメンテーションを重視しており、若い女性、ファミリー層、中国市場の消費者動向などの情報を積極的に収集し、詳細に分析し、新商品開発に生かしている。

王課長によれば、「同社は各国の食文化を取り入れながら、台湾人の生活が、より豊かでより楽しくなるようなライフスタイル提案を行っている。」という。また、「共働き世帯が多く、少子高齢化が進む台湾では、一世代前とは、食生活が著しく変化していることが分かっているため、メディアを活用したPR戦略を積極的に行っている。」という。例えば、業務用食品以外の販路として、消費者向けの冷凍食品需要を喚起し、販売促進に繋げている。

同社のキャッチフレーズは、「有了桂冠、歡享輕鬆生活、就是這麼簡單。」～「桂冠」があれば、簡単にラクラク生活をエンジョイできます。～」である。このキャッチフレーズは、現代に生きる新しい都市生活者をターゲットにしたものであると



図5 「一個人生活的小小滿足」(追劇篇)

出所：同社プレゼン資料より抜粋

(<https://www.youtube.com/watch?v=0uZNNaFvbuw>)



図6 「桂冠湯圓-【真實團圓篇】

出所：同社プレゼン資料より抜粋

(<https://www.youtube.com/watch?v=L7iDDngdSW8>)

言えよう。

なお、このキャッチフレーズを具現化するため、同社は「一個人生活的小小滿足」(一人の生活も悪くない)という都市生活者へのライフスタイル提案を行うCMを作成した。

さらに、台湾では、冬至に家族で「湯圓」という伝統的なデザートを食べる風習があるが、こちらもシングル世帯のライフスタイルに合わせた製品提案を行っている。

王董事によれば、「一年で最も寒いと言われる冬至に、温かく美味しい「湯圓」を提供したいという思いで製品開発を行った。」という。台湾では、QQ(キューキュー)と称し、歯ごたえのあるもちもちとした食感が好まれるが、このもちもちの食感を生み出す技術は同社で独自に開発したも



図7 桂冠湯圓

出所：筆者撮影

のである。冷凍の「湯圓」を電子レンジで温めたときに、もちもちの食感が残るよう、独自技術により、その製造方法を確立したという。

これらのテレビCMは、桂冠の食品を生活に取り入れ、シングルライフを満喫する都市生活者が映し出されている。日本では「おひとりさま」という言葉も定着し、一人で食事をするのことに對して抵抗感が少なくなってきたが、台湾では家族や親族単位での食事がいまだ多く、特に若い女性が一人で食事に行くには勇気がいるという(桂冠の冷凍食品は、イタリアンのミートソースパスタなど、若い女性が好みそうな一人用冷凍食品のラインナップも充実させている)。なお、味のレベルについて、創業者の王董事は「競争相手は、もはや同業他社でなく、レストランなどの外食産業である。」と語った。

一方で、伝統的な魚のすり身餃子は同社のロングセラー製品であり、同社の販売戦略上重要な位置を占めている。そのため、家族団らんをテーマに、三世代が集い、鍋を囲むというテレビCMもまた作成している。なお、同社おでん種はセブンイレブンなどに納入しており、シングル世帯に訴求する製品づくりにも努力を惜しまない。



図8 「桂冠おでん種は、心温まるおふくろの味」～桂冠火鍋料-讓家更有味, 有你心更暖
出所：同社プレゼン資料より抜粋
(<https://www.youtube.com/watch?v=LLICJWxxskg>)



図9 台湾工場で製造されている製品群
出所：同社プレゼン資料による

台湾工場で製造する主要製品は、米製品、豚肉練製品、魚肉練製品、マヨネーズ、スナック、健康食品などである。台湾大手食品会社である「統一企業」をはじめ、大手スーパーやコンビニエンスストアに冷凍食品を供給している。冷凍食品市場は50%以上の市場シェアを確保しており、9割近いシェアを獲得している製品もある。

また、同社では良質の原料だけを使用して製品を製造し、原材料の吟味から最終製品の確認までを丹念に行っている。CAS 認証、HACCP 認証を取得した工場内では、食品専門メーカーとして培った厳しい品質管理が行われており、独立した製品検査室で最終チェックが行われ出荷される。

表2 台湾拠点の概要

従業員数	750名
製造拠点	生産開発、中和一工場、中和二工場
認証	CAS、HACCP
営業拠点	営業支店4か所、営業所10か所
物流センター	1か所
冷凍車輛	200台

出所：同社プレゼン資料より作成

製品開発や販売に関しては、顧客からのニーズに丁寧に対応し、密に情報交換を行っている。特に、餃子、マヨネーズ、湯圓などのデザートは「食感」が大事であり、同社技術を生すことができるこうした製品ではシェア（売上高ベース）が高い。逆にシェアを取れない製品は商品ラインアップから落とし、シェアが高い製品のみを残すという「選択と集中」の戦略をとっている。

2014年の売上高ベースは、第一位が湯圓（4.5億台湾元）、第二位がマヨネーズ（4億台湾元）、第三位が魚餃（2.5億台湾元）、第四位が蛋餃（1.5億台湾元）、第五位が燕餃（1億台湾元）である。同社が半世紀にわたり、製造販売を行ってきた伝統餃子類よりも、若年層向け製品の売上が拡大しているが、これは、同社のマーケティング戦略が有効に作用した結果であると考えられるだろう。

桂冠は当初、中華料理を主体として製品開発を行っていたが、現在は世界の料理をターゲットとして製品開発を行っている。競争力を考え、研究開発や新製品の開発は、全て台湾台北の本社で行っている。新商品の開発と販売促進に関しては、同社が契約するフランス人顧問の助言を参考にしながら、「食べるだけではなく、より良く消費する文化」を発信している。そして、消費者ニーズを積極的に取り入れ、消費生活のトータルソリューションを行うことを意識しており、フォーカスグループインタビュー、カスタマーインタビュー、コンシューマーインタビューを行うなど、定期的に消費者から意見を聞く機会を積極的に設

けている。

同社では御粥の冷凍食品も製造しているが、桂冠食品は「自然」「健康」というイメージが強い。そのため、人工的な味付けを控え、自然で素材を活かした味で勝負している。また、元来、冷たい野菜を食さなかった台湾人がライフスタイルの変化により家庭でサラダを作るようになったことから、近年では「カニカマ」など一般消費者向けの製品の需要が伸びている。同社は冷凍食品を扱っているが、それらは、そのまま電子レンジで温めてテーブルに出すのではなく、家庭で工夫して仕上げる要素が強いのが特徴である。つまり、「ひと手間加えて美味しい、並べて美しい製品」を販売しているということである。台湾でそこを重視しているところは少ないため、桂冠のビジネスは先見性の高いビジネスモデルであったと言えるだろう。こうした消費者を主体とした製品開発の背景には桂冠ブランドのDNAがある。

同社では、消費者の心の中にある「桂冠ブランドに対する価値」を、「桂冠ブランドDNA」と名付けた。一方で、「桂冠ブランドDNA」は、一朝一夕に創造できるものではなく、また個々人の心の中のイメージを顕在化させるのは難しい。そこで、インタビューなどからのみでは引き出せない消費者ニーズをさらに掘り下げるため、より消費



図11 桂冠窩厨房（ローレル・クッキングスタジオ）
出所： 同社プレゼン資料より抜粋

者と密にコミュニケーションが取れるよう、2014年には、桂冠ブランドの冷凍食品を活用した桂冠窩厨房（ローレル・クッキングスタジオ）を自社ビルに開店した。

桂冠窩厨房は、実験厨房（テストキッチン）を前身としており、一般消費者に冷凍食品を使った料理を学んでもらうことに加え、顧客から依頼された商品の試作、同社製品の販売専門技術者の訓練、そして冷凍食品業界の料理人の交流をはかること等を目的としている。

特に一般消費者に対しては、冷凍食品を使用して料理を行うことで、美味しい料理ができることを体感してもらう。メニューには各国の食文化を取り入れており、講師には台湾人だけでなく外国人にも依頼している。イタリアンやフレンチのシェフを招き、桂冠の冷凍食品を使って料理してもらい、新たな食材の使い方を提案する。

こうしたレストランのシェフや著名な先生の講座は定期的に行いつつ、同社のターゲットである一般消費者が簡単に作れるレシピを提供するため、一般の方を先生として講座を開催することもある（基本的には、電子レンジで作れる料理がメインである。）。例えば、山東姥姥（山東省のおばさん）が主催する料理教室は大人気であり、申し込みが殺到している。今年86歳にある山東姥姥



図10 桂冠ブランドのDNA
出所：同社プレゼンシート

のキャッチフレーズは「レストランでは食べたことのない美味しい料理。作れなくても大丈夫、私が教えてあげましょう。」というものである。

なお、台湾の冷凍食品会社で同じ取り組みをしているところはなく、例えば加工食品メーカーの愛之味は、テレビクッキングの制作はしているが、クッキングスタジオの運営はしていない。つまり、桂冠は、食品製造業という枠を超えたサービス業との連携を意識し、消費者ニーズの的確な把握とそれらを積極的に取り入れることで、戦略的に製品開発を行っていると言えよう。

王課長によれば、顧客から直接フィードバックを得られることがクッキングスタジオの良さであるという。つまり、クッキングスタジオは、桂冠と消費者をつなぐプラットフォームであることに加え、同社の新商品開発を行う R&D センターの役割も果たしているのである。

このように、現在、新規事業については、一族の若き実力のある後継者たちが、承継された事業分野を中心に、各々の得意分野を生かし活躍している。王兄弟の末っ子である四男の王正明総経理に、桂冠実業グループの後継者について質問を行ったところ、「一族の若い後継者は何れも大変実力があるので、それぞれ競い合ってグループを盛り立ててほしい。ただし、一つの可能性として、将来的には社長が一族出身ではなく、専門経営者を使うことも検討している。その場合には董事会（コミッティー）形式を採用するが、実質的には専門経営者に任せることになる」という答えが返ってきた。

* 冷凍食品を通じて文化と世代をつなぐ～王正一董事の日本への思い

前出創業者の王正一氏によれば、各人の食の好

みや習慣はそれぞれ違うので、中国大陸向けの商品は中国人の嗜好に合わせている。例えば中国南部の方は甘い、北部の方は酸っぱい、内陸は辛いといった具合である。台湾人はそれらの違いが分かるため、中国全土にわたる展開が可能である。

台湾文化というのは複雑である。スペインの統治から始まり、ポルトガル、日本、そして中国と、多くの文化が融合し、今の台湾文化が形成されてきた。特に、台湾では日本統治によって日本の食習慣が定着したが、戦後は中国人が来て、中華料理も一般的になった。こうした歴史的背景もあり、台湾独特の食文化や食のイノベーションとも言える台湾独自の食文化が形成された。

王董事は日本統治時代の 1942 年に生まれ。終戦時は 3 歳だった。そのため日本文化への親しみはあるものの、日本語は自学自習で習得したという。

同社は、30 年前に日本市場への拡販を行うべく、代理店と一緒に日本に滞在し営業活動を行ったが桂冠ブランドでのマーケット参入は難しいと感じている。なぜなら台湾だとトップブランドだが、日本ではブランドイメージがなく、認知度も低いため、スーパーなど小売業者に採用してもらうのは困難だからである。ちなみに王総経理自身は、過去、ロブスターを日本に大量に輸出したことがあるが、製品の輸出経験はほとんどない。

一方で、製品でなく製造機械については、日本の食品製造機械や設備を輸入してきたため、王総経理自身は、日本の機械商社との繋がりも深く、日本企業と良好な関係を構築してきた⁴。食品製造に必要な機械については、常に世界の食品機械展示会などで探し、機械輸入代理店を通じて購入している。しかし、製造開始当初は、食品加工や

⁴ 日本の食品自動包装机メーカーである株式会社三和自動機製作所の HP には海外納入先として桂冠実業の名前が記載されている。

冷凍食品用の梱包には、日本の機械を使うことが多かった。今は台湾の機械を使うことも多くなっているが、特に食品梱包は、一部日本から技術提供を受けているため、食品製造の要となる製造機械に関しては、日本との繋がりを強く感じているという。

創業者である王董事は、董事長退任後、第一線を退いた。しかし、日本企業と台湾企業との交流や連携を促進する台日産業技術合作促進会の理事として、日本へのミッション団に参加するべく、年に数回来日している。「公的ミッションという性格上、日台交流の一端を担うべく、日本企業との提携関係をいつも模索しており、日本側に良い製品があれば取引をしたい。」と語った。

王董事によれば、「桂冠実業は付加価値を向上させるビジネスを一貫して行っている。今後、海外はもちろん、日本からも高付加価値素材を輸入し、自社製品の価値を高めるようなビジネスモデルを検討したい。」という。

王董事は、来日ミッション等を通じ、日本企業との連携を模索する中で、日本には機能食品やフレーバー、ソースなど高付加価値な食品が多くあることを知ったという。そこで、例えば中国や台湾市場を日本企業と共同で開発できないか検討しているとも語った。また、少子高齢化が進む台湾において、今後、介護や高齢者用食品の需要が拡大することから、消化しやすく、健康で、安全な食品を開発したいという希望を持っているようである。

このような王董事のアイデアや思いは、「桂



図12 左から王正明総経理、王正一董事、王鈺婷 (sabrina) マーケティング課長
出所：筆者撮影

冠 45 年。老舗新意。」という社是に集約されていると言えよう。そして、こうした王董事の行動や後姿は会社の DNA として一族の後継者たちに脈々とこれからも継承され、会社の持続的な発展を支え続けていくに違いない。

*本稿は、(財)交流協会共同研究助成事業(人文・社会科学分野)「日台経済交流を支えた台湾経済人～台湾企業家(創業者)とバイ・プレーヤーの視点から」(プロジェクトリーダー：東海大学大学院経営工学・情報研究科教授劉仁傑教授、新潟大学経済学部岸保行准教授)による、2015年9月7日の台湾でのヒアリング調査に基づき執筆を行っており、特に新潟大学岸保行准教授には多大なご協力とご知見をお借りした。また、当該調査事業に対して共同研究助成を頂いた公益財団法人交流協会に、この場をお借りし心より感謝を申し上げます。

(了)

台湾内政及び日台関係をめぐる動向（2016年5月下旬～2016年7月上旬）

蔡英文総統の中南米訪問、沖ノ鳥島問題をめぐる紛糾

石原忠浩（台湾・政治大学日本研究プログラム助理教授）
（元（財）交流協会台北事務所専門調査員）

蔡英文総統は6月24日から7月2日まで友好国のパナマ、パラグアイを訪問した。パナマでは運河拡張式典に参加したほか、パラグアイでは国会で演説した。往路はマイアミ、復路はLAに立ち寄り米議員などと会見した。4月末から5月中旬にかけて沖ノ鳥島の排他的経済海域で海上保安庁船籍が違法操業していた台湾漁船を拿捕したことで台湾では小規模の抗議活動が起こり、台湾当局は公船を当該海域に派遣するなどして緊張が高まったが、5月20日の政権交代を機に対話路線へ転じることとなった。

一、蔡英文総統の中南米訪問

蔡英文総統は、6月24日から7月2日まで「英翔專案」と名付けた中南米訪問を行った。国交を有する国が少ない台湾では、現職総統の外国訪問は一大事件であり、その外遊に対して「○○專案」と固有名詞が名付けられることが多い。

蔡総統は24日出国前の空港ロビーで今回の外遊には「踏実外交」という新政府の新しい外交思惟を示した。蔡総統は「外交事務は高望みすべきでなく、相互互惠に資するものであれば、全て行うべきものである。友人をつくるのは正式な国交国に限るべきではなく、価値感が近く、誠実に対応（誠懇相對）できる相手であれば、国交の有無に関わらずいずれも台湾の友人であり、この考えこそ踏実外交である」と説明した。また、今外遊の三大任務として「台湾の国際的知名度を高める」、「外交の最前線で活躍する同胞に自信を届ける」、「台湾とラテンアメリカ各国との経済貿易協力の強化」を掲げた。

25日のトランジット先の米国マイアミでは、現地華人団体の歓迎宴に出席して挨拶をしたほか、共和党大統領候補として予備選に出馬していたフロリダ州選出のマルコルビオ議員と会談し、国防協力、経済協力に言及し、潜水艦の国産建造につ

き米側の技術協力を求めたほか、TPP交渉への加盟及び米台投資貿易枠組み協定（TIFA）強化への協力を求めたと報じられた。また米台間の暗黙の了解として蔡総統一行のマイアミ滞在時の日程は全て非公開とし、当地を離れた後に、総統府関係者から随行者団へ当地での活動について説明がなされた。このスタイルは過去の総統の外遊と比べると異常なほどローキーであり、そこでかえって米政府からは厚遇を受けることになったとの指摘もなされた。

パナマへの移動においては、初めて非国交国のキューバの領空を通過した。

25日のパナマ到着後は、運河拡張工事完成式典に参加する米議員団15名との会見、華僑との歓迎宴に出席したほか、蔡総統に同行しているエバグリーングループの投資計画先の視察も行った。

26日午前、エバグリーン集団が投資するのコンテナ埠頭の視察を行ったほか、ドミニカ、ホンジュラス、エルサルバドル、グアテマラ首脳と会談（注：原文は「会晤」）し、同日午後にはパナマ運河拡張工事完成式典に出席し、世界各国から出席した関係者と交流した。台湾紙の報道では、蔡総統は各国首脳とともに最前列に立ち、バイデン米副大統領夫人、スペインのファンカルロス1世などと自然な交流をしたと報じられた。

27日は、パナマ政府に医薬品の贈呈のほか、ハイチ外相との会見、バレーラ大統領と会談し、人身売買など犯罪防止協力に関する協定を締結し、同大統領の招宴を受けた後、パラグアイに移動した。

翌28日は、同国のカルテス大統領と会見し、勲章を授与されたほか、航空協定に署名し、同国国会で演説し、そこでは、台湾とパラグアイの長期にわたる友好関係に感謝の意を述べた上で、「民主は天から降ってくるものではない、勇敢な国民が不断に追求することがあってこそ、実現できる」と台湾の民主を誇った。同日夜は華僑団体の招宴に出席した。

29日は当地の公立学校を訪問し ASUS 社が提供するパソコン贈呈式に参加した。パラグアイのメディアは学校の修繕などに20万ドルの援助がなされたと報道された（政府筋は台湾商人ビジネスマンの公益事業と説明）。また、農村及び肥料工場を視察したほか、随行メディアとの懇談に応じた。この席では、メディアから外交以外の質問も飛び出し、兩岸関係について、中国国台弁報道官が「台湾側が92年コンセンサスを認めないがために、兩岸の連絡及び交渉メカニズムが停止することになり、責任は台湾側にある」と指摘したことに対し、「自分は就任演説の際に最大限の誠意と柔軟性を中国側に示しており、中国側も仔細に演説の内容を理解することを望む」と述べるところがあった。また「踏実外交」と過去の「実務外交（中文：務実外交）」との違いについての質問には、「穏健に一步一步着実に足跡を残す精神で前進し、台湾が直面する各種の外交的挑戦を克服していくことである。同時に、相互利益と互惠の方法で我が国と友好国の相互補完の空間を探し、その中から具体的で実行可能な実質的協力関係を発展させることにある」と説明した。

30日にはトランジット先の米LAに立ち寄り、AIT 主席の出迎えを受け、夜は当地華人団体の歓迎宴に出席した。同招宴には、エドロイス下院外

交委員長など民主共和両党の議員が多数出席した。また総統府の説明によると同地滞在中に、ポール・ライアン米下院議長からの電話を受けたほか、クリントン元大統領に初めて電話をかけ、ヒラリー夫人の次期大統領選挙が円満な結果となるよう祝福したと説明した。

7月2日に帰国した蔡総統は、桃園空港で「8泊9日の外遊中に7人の友好国首脳と会談したほか、20名以上の米国会議員と会見、意見交換をすることができた。また、パナマでの式典の際には13人の各国要人と交流することができた。特にパナマ、パラグアイでの首脳会談を通じて今後の協力関係の方向を確認できた」との談話を発表した。

今回の外遊に関して政権寄りの『自由時報』は、今回の外遊は多くの記録を達成したとして、陳水扁及び馬英九の初外遊と比べると、米国でのトランジットでは活動範囲も滞在先のホテルに限定されることはなく、多くの視察日程を組むことができたほか、米国の重量級国会議員による航空機への出迎えを受け、一部の米関係者は蔡総統との会談を公開し、「台湾総統」と呼称する者もいたとし、今回の外遊は目を見張る成果があつと肯定した。その一方で、中国の台頭と国際社会における台湾に対する圧力と封鎖の中で、台湾外交は未だに大きな挑戦に直面しているとの指摘もなされた。

7月5日、蔡総統の外遊に同行した李大維外交部長は立法院の外交国防委員会で今回の外遊の成果につき報告した際に立法委員の質問に答える形で「台湾が国交を有する国の中で関係が不安定な国は確かにあるが、外交部は悲観する権利はなく、全力に取り組む」として、一部の国交国が「台湾断交、中国国交樹立」の選択をする可能性を否定しなかった。友好国との関係安定のために、李部長らは8月末にニカラグア等ラテンアメリカの友好国、9月下旬にブルキナファソ等アフリカの友好国を訪問する予定であると報じられた。

馬政権時代は良好な兩岸関係の雰囲気壊さな

いために、台湾との国交国を奪うことを自制してきた中国だが、李登輝、陳水扁時代のように対外関係において中台間のゼロサムゲーム的なものが展開するようになれば、「台湾断交、中国復交」のドミノ現象が起こることも十分に予測される。

二、沖ノ鳥島をめぐる日台間の緊張から対話への転換

東京から南方約 1740 キロ、小笠原諸島父島から約 900 キロの場所に位置する沖ノ鳥島は、東西約 4.5km、南北約 1.7Km、周囲約 11Km からなる珊瑚礁島である。満潮時には東小島（面積 1.58㎡）が約 6 cm、北小島（面積 7.86㎡）が約 16cm 水面上に出るだけであり、波の浸食により消滅の脅威にさらされていることもあり、1987 年から護岸設置等の保全工事を行い、その後も飛来物を防ぐためにチタン製防護ネットで覆う工事が行われるなどして二つの小島保全のために約 300 億円をかけている。この沖ノ鳥島が「島」か「岩」かをめぐり日台間が緊張した。

1. 台湾漁船の拿捕とその余波

4 月 25 日、日本が排他的経済水域（Exclusive Economic Zone；以下略称 EEZ）を設定している沖ノ鳥島周辺の海域で違法操業していた屏東県琉

球籍の漁船「東聖吉十六号」が海上保安庁船籍に拿捕された。同船には台湾人船長 1 名のほかインドネシア人及び中国人船員 9 名が乗船しており、日本側は EEZ 内での違法操業に基づき、600 万円（176 万台湾元）の「訴訟保証金（法律原文は担保金）」の支払いを要求し、台湾漁船が支払いを拒否した場合には日本へ移送されると報じられた。日本の「違法操業」との主張に対し、台湾側は沖ノ鳥は「島」ではなく、「岩」であるので、日本政府は EEZ を設定することはできず、日本の主張は違法であり、問題解決のために早急に交渉を望むとの論陣を張った。

翌 26 日、漁船主の親族は「訴訟保証金」600 万円を支払い、船長は釈放されたが、台湾の漁業団体は激しく抵抗した。張善政行政院長も「畳 3 枚の広さが何故、島と呼べるのか！」と台湾の漁業団体を「鼓舞」する発言をし、国民党政権寄りのメディアも対日強硬姿勢を煽るかのよう同発言を大々的に報じた。特に『聯合報』は 27 日付のコラムで 2013 年 4 月に調印された漁業取決めを引き合いに出し、尖閣諸島海域で台湾側が漁業権の拡大（注：尖閣諸島の EEZ 内海域での台湾漁船の操業を指す）を獲得できたのは、強硬な態度を堅持し、巧みに北京と東京の間のバランスを利用したからであり、沖ノ鳥海域で日本が主張する EEZ

表 1 英翔專案の公開日程

日付	滞在地	主な公開活動
6 月 24 日	米マイアミ	マルコルビオ上院議員と会見、華僑団体歓迎宴
6 月 25 日	同上 パナマ	米：米議員 2 名と会見、マーリンズのチェン投手と会見 パ：運河視察、当地華僑の歓迎宴、米議員団会見 15 名
6 月 26 日	パナマ	エバ集團のコンテナ港視察、ドミニカ等 4 개국首脳と会見、運河拡張工事完成式典出席
6 月 27 日	パナマ	バレーラ大統領と会談
6 月 28 日	パラグアイ	カルテス大統領と会談、同国国会演説、華僑団体歓迎宴
6 月 29 日	同上	現地学校、農村視察、随行メディアとの懇談
6 月 30 日	米 LA	AIT 主席の出迎え、米議員と会見、華僑団体歓迎宴
7 月 1 日	移動	
7 月 2 日	帰国	台湾帰国

資料元：総統府ホームページ及び台湾各紙報道

内で漁民が平和裏に操業できるようにするには、海巡署船籍を派遣し台湾側の強い姿勢を見せることが必要ではないかと強調した。またこの時点で外交部は、正式文書では、沖ノ鳥島がEEZを設定できる「島」か、12カイリの領海の権利しか有せない「岩」かの立場には踏み込まず、「[「中立的」な沖ノ鳥」と称する立場にとどめた。

27日には、釈放された船長が「日本で丸裸にされて屈辱的な取り調べを受けた」との声が台湾社会に伝わるなどしたこともあり、同日漁業団体は交流協会台北事務所に押しかけ抗議書を手渡したが、そこでも交流協会関係者が片手で抗議書を受け取ったことが、ニュース番組で大々的に報道され「無礼な日本人」という感情的な問題にまで発展した。同日、馬総統は再度対応を協議するために国家安全ハイレベル会議を召集し、

「日本がこのように台湾漁民を虐めることは許されない」、「強硬にすべき時は強硬に、争うべきことは争うべし」、「今件は国家の格にかかわる問題であり、なめられてはいけない」など感情的な表現をするとともに、台湾当局の厳正なる立場として「公海における漁民の操業の自由を防衛する」、「日本の違法な権利の拡張に反対する」、「台湾政府は沖ノ鳥『岩』周囲の公海海域で台湾漁民の操業を協力、保護する」の三項目を表明した。また、同日から政府機関が沖ノ鳥島に言及する際の文言は「沖ノ鳥島」ではなく、「島で」あることを認めない姿勢を強調する「沖ノ鳥岩」(沖ノ鳥礁)に統一することが決定されたと報じられた。

これら、日本政府の立場と異なり台湾側が沖ノ鳥島が「島」ではなく、「岩」であると強硬に主張する根拠は、海の憲法と称される「国連海洋法条約」(UNCLOS)の第121条に対する解釈の違いから生じている。同121条は島についての定義であるが、以下を参照いただきたい。(http://www.houko.com/00/05/H08/006.HTM#s8)

1項：島とは自然に形成された陸地であって、水に囲まれ、高潮時においても水面上にあるものを

いう。

3項：人間の居住又は独自の経済的生活を維持することのできない岩は、排他的経済水域又は大陸棚を有しない。

日本政府の立場は沖ノ鳥島は第1項の立場を満たしているので、沖ノ鳥島は当然「島」であり、EEZが設定できるとの立場をとっている。一方、台湾(中韓両国もだが)は、第3項をとりあげ、沖ノ鳥は「人間の居住又は独自の経済的生活を維持することのできない岩はEEZを有しない」に合致しており、「豊数枚の土地で生活できるはずがない」とし、日本の立場に真っ向から反対している。どうして、国連海洋法条約は異なる解釈が可能な曖昧な条文にしたのかについて、内外の専門家は「条文を明確にしないことで、利害の対立する国々が独自解釈する余地を与え、同条約の採択に持ち込むことができた」との指摘がされている。

翌28日には岸田外相が、「沖ノ鳥島は国連海洋法条約、島としての地位が確立しているので、その周辺には排他的経済水域が存在する。」「台湾側の独自の主張は受け入れられない」と述べたが、日本政府はこの立場を一貫して主張している。

台湾外交部も同日の記者会見で、台湾側の立場を補強するように、「1990年代から日本が定義する沖ノ鳥が『島』であるとの主張は認めていない」、「国連の大陸棚限界委員会(CLCS)の(沖ノ鳥が『島』であることを前提にした大陸棚の權益を認める)勧告がでるまでは、日本は他国が当該海域で漁業操業を行う權益を尊重すべきである」との説明を行った。翌29日には、林永楽外交部長が沼田交流協会台北事務所代表を外交部に呼び、強い抗議を行ったがこの際も、日台双方は前述の第1、第3項を論拠にして攻防を展開した。

一方で、尖閣諸島、歴史問題において対日姿勢が「迎合的」、「軟弱」とも揶揄される民進党も29日に党報道官の名前で今回の問題につき①政府は全力で漁民を支援し、我が国漁民の權益を必ず確

保する。②台日双方には漁業問題に対する多くの交渉があるので、政府は既存のメカニズムを通じて積極的に日本側と意思疎通をはかり、類似の漁業紛争が発生しないようにする。③双方は合意する前の段階において、日本側に対しては自制を求め、論争のある海域で操業している台湾漁民を邪魔する行為をしないよう呼びかける。④民進党政権成立後に、日本側と全力で意思疎通を行い、我が国漁民の権益を確保するの4項目の声明を表明した。

この声明は、次期政権党としての基本姿勢を示すものとなった。

2. 台湾公船の沖ノ鳥島海域近海への派遣

5月1日、行政院は海巡署及び漁業署船籍が沖ノ鳥島海域で操業する漁民の権益保護を目的に当該海域に派遣するとし、出航前に高雄で記者会見を行った。また国防部は、不測の事態に備えて海軍船籍の派遣を検討する旨の報道もなされた。5日には海保船籍に拿捕された船長が屏東の故郷に戻ったが、張行政院長がわざわざ船主の地元にかけて、10万台湾元の慰問金を手渡すとともに、「漁民の権益を保護する強い姿勢を継続する決心を示すことで日本政府を交渉のテーブルにつかせることができる」と強調した。

その後、台湾の公務船は沖ノ鳥島海域に到着し公務に従事したが、尖閣諸島への対応とは異なり、台湾側メディアが大挙して撮影クルーを現場に派遣することもなく、台湾世論の関心が、高まることはなかった。現場では日台双方の公船が遭遇し、日本の海保船籍が台湾側を監視、追跡するようなことはあったと一部の報道があったが、大きな混乱や衝突は起きず、操業している漁民関係者からは、海保船籍を気にせず操業できることで漁獲量が増えたなど台湾当局の行動を評価するところがあった。

3. 新政権下の展開：対話メカニズムの立ち上げ

5月20日に総統就任式を終え、新政権の仕事

始めともいえる週明けの23日、行政院の童振源報道官は、記者会見で台日間で最近発生した漁業問題に関する紛糾に対して、双方は交渉を重ねたうえで合意に達し、「日台海洋協力対話」（中文：台日海洋事務協力対話機制）が成立し、日本との間で積極的に各種海洋事務の協力につき促進していくと宣言した。

童報道官は、はじめに「新政府の立場が変化するものではないが、本問題は交渉を通じて争議を解決すべきであると考えており、沖ノ鳥問題については法律上の特定の立場をとらない」と説明した。次に「台日友好関係を維持することは台湾の全体的な対外関係にとって極めて重要であり、両国間は相互にいかなる緊張を高めるかのような行動をとるべきではなく、海洋事務上の建設的な対話と協力を積極的に展開、積み重ねていくべきである」と対話の重要性を訴えた。最後に「両国の友好関係の維持との共同認知に基づき、双方は亜東関係協会と交流協会の枠組みの下に、なるべく早急に海洋事務協力対話メカニズムを成立させることを決定した」と説明した。また同報道官は「台日双方は7月下旬までに同メカニズムを正式に成立させ、第一回目の対話を行うとの初歩的な合意に達し、同対話メカニズムでは、漁業協力以外に、環境保護、科学研究、海上緊急救難など双方が同意した海洋事務の協力議題が含まれる」と説明した。かかる行政院の対日政策の修正に伴い、同日海巡署が発出したプレスリリースには、4月下旬以降使用されていた「沖ノ鳥礁公海」が「沖ノ鳥海域」に改められたと報じた。

新政府の対日政策の修正に対しては、漁民団体及び国民党議員だけでなく、民進党、時代力量などの緑系立法委員も「変化が早すぎる」といった戸惑いも散見された。これらの疑義については李外交部長は、7月末の対日交渉と当該海域の漁業権拡大に自信を示すとともに、漁民保護活動は継続することを強調しながらも、外交には曖昧的な空間も必要であるとの理解を求めるところがあった。

表2 新政府の沖ノ鳥島問題への対応

	沖ノ鳥島の論争に対する新政府の対応		沖ノ鳥島海域での台湾漁民の権益確保への自信
満足	23%	自信ある	34%
不満	24%	自信ない	35%
意見無	53%	意見なし	31%

5月30日に公表された『TVBS』の世論調査は、新政権成立1週間で打ち出された新方針についての事例とその反応を取り上げているが、沖ノ鳥島関連では、沖ノ鳥が「島」か「岩礁」か特定の立場を採らないことへの対応と新政権の漁民の権益確保への自身についての設問となったが、満足か不満かかの反応はいずれも拮抗する内容となった。(表2)

その後、6月21日に日台外交当局は、同日台北で日台海洋協力対話予備会議が開催されたことを公表し、第一回会議の日時、場所及び議題につき十分な意見交換を行い、予備会議には邱義仁亜東関係協会会長と沼田幹夫台北事務所代表が挨拶を行い、スムーズに行われたと報じられた。

政権交代直後のこの早い展開は、4月末の台湾漁船拿捕事件直後から、日本側と民進党の間で「対立回避」という前提のもとに、隠密に対話の枠組みを模索する根回しがされた形跡が見られたことは、複数の緑系立法委員から苦言も呈されたことからわかる。いずれにしろ、馬政権末期に勃発した懸案問題の一つは、対話を通じて合意、共通認識を求める方針が合意されたことは、安定した日台関係のためには双方にとって望ましいことであり、今後の展開に期待したい。

三、蔡英文政権1か月と世論の反応

1. ひまわり学生運動参加者の告訴取り下げ

5月20日に始動した蔡英文政権だが、迅速な動きが見られた。新政権の実質上の初勤務日となった23日、行政院は江宜樺内閣時代の2015年2月にひまわり学生運動に関与した関係者126人

に対する告訴を取り下げる文書に署名したと発表した。童振源報道官は、「林全院長は、ひまわり学生運動は政治事件であり、単純な法律事件ではない、和諧を少しだけ多く、衝突を少しだけ少なく(多一点和諧、少一点衝突)の原則の下に、なるべく寛大に処理することとして、告訴の取り下げを決定した」と説明した。緑陣営の『自由時報』紙は、これは新政権の出勤初日に飛び出した「政治的なご馳走である」(政治大業)と報じた。告訴が取り下げられた事案は、行政院及び立法院の侵入、警察署の集団包囲事件の三大事案にかかわった延べ126人である。

行政院の決定について、当時の行政院長であった江宜樺氏はメディアへの投書で、今決定を批判したが、ひまわり学生運動に深く関与し、自身も起訴されていた時代力量の黄国昌立法委員は、「行政院は過去の政府の施政の過ちを認めたものであり、江院長は最も文句を言う資格がない」と厳しく批判するところがあった。

告訴取り下げ決定後に『TVBS』が実施した世論調査では、林全内閣が告訴を取り下げたことに対し「賛成45%」、「賛成しない40%」に二分する結果となったが、支持政党傾向との関連に目を向けると緑陣営の民進党と時代力量支持者は83%が支持したのに対し、国民党支持者は僅か15%しか支持しておらず、本事案は藍緑対立を体現する結果となった。

5月30日、行政院と民進党立法院党団関係者は「行政立法協調会報」を開催し、立法院の今会期で成立を目指す優先法案を四大項目「経済」、「社会」、「政治」、「兩岸」に分類し、21法案を選択した。その中で、2014年のひまわり学生運動から喫

表3 林全内閣がひまわり学生運動関係者への告訴取り下げと支持政党傾向の関係

	支持政党傾向					
	全体 100%	民進党 (25%)	国民党 (19%)	時代力量 (6%)	中立 (42%)	その他 (8%)
賛成	45	83	15	83	34	29
不賛成	40	11	78	12	44	51
意見無し	14	7	7	5	22	20

緊の課題となって久しい、「兩岸協議監督条例」、蔡総統が就任演説でも言及した税制改革法案などが盛り込まれる予定であるとされている。

2. 蔡英文総統が引き続き党主席を兼任

5月25日、蔡総統は民進党の党章の規定に基づいて、党主席に就任した。蔡主席は、宣誓式で「ひまわり学生運動の告訴取り下げは改革の開始にすぎない。引き続き民進党は多くの変革を創造していく。移行期の正義、年金改革、司法改革はすでに着手しており、皆には括弧して待っていただきたい」と決意を述べた。

党の事務を統括する秘書長には、洪耀福副秘書長が昇格したほか、副秘書長には立法委員を五期務めた李俊毅、前台北市議の徐佳青、前党秘書処主任の高幸雪の3名が就任した。党報道官には、黄適卓元立法委員を新たに迎えるなど5人体制となった。他の部門は、政策会執行長は段宜康立法委員、国際事務部は羅致政立法委員、中国事務部は張天麟立法委員がそれぞれ兼務する。

3. 蔡英文政権1か月と国民の反応

林全内閣就任1か月を控えた6月20日前後に台湾各紙は、新政府の1か月を回顧したが、そのほとんどが行政部門と立法部門の間の政策面の擦り合わせがスムーズに行われていないことを指摘するものであった。沈富雄元立法委員は、内閣を交響楽団に例えて「それぞれの楽器の演奏者は専門的な技術を持っているが、一緒に奏でられる音律は調和性がない。最大の問題は指揮者である林全院長にある。常に蔡英文の顔色を窺い、蔡の顔

色が良くなければ、林全の指揮は更に自信がなくなる」との独特の表現で論じた。林院長を補佐する林錫耀副院長は、「政権初期にある程度の齟齬は仕方がない、現在すでに慣らし運転は7 - 8割程度進み、7月以降は佳境に入っていく」と今後の施政に自信を示した。

蔡総統は中南米訪問を直前に控えた6月22日に開催された党中央執行委員会の席で、「民意の最前線に立つ民意代表（議員）、地方首長には国民の政策に対する反応を引き続き反映させてほしい。そうであってこそ、我々の執政の方向は安定し、穏健かつ正確なものになる。しかし、私が皆に指摘したいのは、民意を反映させること以外に、施政に従事している同志は異なる役割を担っていることを理解してほしい。行政と立法、地方と中央等我々の役割は異なっている。しかしながら、我々は同じ執政チームである。したがって、内部の整合は更に默契が必要であり、意思疎通は全面的に必要であり、改革の歩みは更に一致させる必要がある。執政チームは、唯一の共同目標である現在台湾社会が直面している台湾社会の問題を解決することである。」と党员全体に協力を呼びかけた。

また同日、蔡総統は、5名の立法委員、管碧玲（謝系）、陳亭妃（游系）、吳秉叡（蘇系）、段宜康（新潮流系）、陳明文（英系）と昼食会を催したが、その席で蔡総統は更に直接的な表現で党内の各勢力を代表する委員に対し「行政部門（政務官）の人々は、経験を積む時間が必要である。常に彼らを批判ばかりしていると萎縮してしまい、何もなくなってしまおう」として、理解と協力を求めるところがあったと報じられた。

『TVBS』が6月14-16日に実施した蔡英文就任1か月満足度世論調査は、5月の就任直前に比べて満足度が7%上昇し47%となったが、これは8年前の馬英九と比べても7%高い数字となった。2000年の陳水扁に対する満足度が高かったのは、初の政権交代直後でまだ蜜月期が続いていたことを示し、馬英九の支持率低下は当初の期待値が高すぎたことを反映している。(表4) 林全院長及び林内閣への評価は、林院長自身への「満足38%」が「不満33%」を僅かに上回ったが、内閣全体の評価では「不満38%」が「満足34%」を上回る結果となった。(表5)

政権発足当初から、経済的世界的低迷状況、停滞が予測された兩岸関係等、外部環境の困難から、台湾住民は蔡英文政権への過度な期待を慎んできたが、政権発足1か月を経て、満足度が上昇したのは、「それなりに頑張っている」との好意的見解が多勢を占めているといえるのであろう。

6月に立法院の本会期は終了するが、移行期の正義の核となり、国民党を狙い撃ちしたとみなされている政党不当資産処理条例などは7月以降の臨時会の開催を通じて成立を目指す予定である。行政、立法機関の間の諸政策に関する默契は、少数政権であった陳水扁時代はもちろんのこと、絶対多数を誇った国民党政権でも処理に苦労してきたことを思えば、蔡政権の現在の試練は想定内のこととも思える。蔡総統が当選直後から繰り返し

表4 蔡英文、陳水扁、馬英九の就任1か月の満足度比較

	陳水扁	馬英九	蔡英文
満足	77%	41%	47%
不満	7%	37%	18%
意見なし	16%	21%	35%

表5 林全行政院長、林内閣への満足度

	林全行政院長	林全内閣
満足	38%	34%
不満	33%	38%
意見なし	28%	27%

説く「台湾社会が直面する問題の解決」のために、意思疎通を重ねて、スムーズな政権運営の軌道に乗ることを期待したい。

4. ハーグ常設裁判所の南シナ海問題の判断への台湾当局の反応

7月12日、オランダ・ハーグの常設裁判所は中国が南シナ海で「9段線」に基づいて行ってきた主張をほぼ全面的に退けたが、台湾では1950年代から実効支配する南沙諸島の太平島が、「島」ではなく「岩」だと判断されたことに反発と動揺が広がった。

同日夜、総統府はプレスリリースで「常設裁判所は審理の過程で台湾に対して招聘、意見聴取もしなかった。今回の太平島に対する判断は、わが国の南シナ海における権益を深刻に傷つけるものであり、我々はここで今回の判断を絶対に受け入れないと表明し、また今判断が台湾に対する如何なる法的拘束力もないことを主張する」と表明した。その一方で、「南シナ海の論争に関しては、多国間交渉を通じて、平和的解決を目指すべきであり、我々は平等な交渉の上に関係諸国とともに当該海地域の平和と安定を促進することを望む」と南シナ海問題の平和的解決を求める姿勢を強調した。

外交部も同日、プレスリリースで仲裁案の判断は受け入れられないと表明するとともに、「仲裁裁判所は、台湾が統治する太平島を、フィリピンなど他国が占領している南沙諸島の他の島嶼とともに、すべてが『岩』であると宣言したことは、太平島がEEZを擁することができないとの認定であり、台湾の南シナ海における法的地位と権利を著しく損害した」と批判した。

翌13日、蔡総統は高雄左營の海軍基地で南シナ海に向けて巡航する康定級フリゲート艦に乗船し、「今回の仲裁案の太平島に関する判断は、我が国の権益を著しく犯している。今回の諸君の任務は台湾人民が国家利益を防衛する決心を表明するものである」として太平島の主権を守る姿勢を訴えた。

台北俳句会会長 黄靈芝先生を偲ぶ

杜青春

黄靈芝先生は去る3月12日にご登仙されました。台北俳句会永年の会員方々の思いをここでご紹介致し、靈芝先生の御人徳を偲びたいと思います。

以下、「黄靈芝追悼文集・句集」台北俳句会編より会員からの追悼文を抜粋します。

黄靈芝師逝く

吳昭新 謹誌

戦後台湾唯一の日本語俳句会の主宰である黄靈芝先生が3月12日急逝なされました。その弟子たる私も一言述べなくてはならないと言われました。

私が弟子であった期間はほかの大部分の方に比べればあまりにも短かすぎました。79歳で入会し2009年の末からのわずか六年ばかりである、それも師が体調を崩してからのことであり、それゆえ師の教えに直々与かったのは初めの一年ばかりで指折り数えるほどしかなかった。弟子入りする前から師のご高名は窺い知っており、著作も読んでおりましたが、入会后特別に師より頂いた多くの師の傑作より師の小説、詩学、芸術の造詣をより深く窺い知ることができました。ただ日本語を少し話せるだけと言うことで誘われて入った句会でしたが、もともと何かやりだしたらのめり込む性質なのでネットの上で手に入る俳句の資料を片っ端から読み漁り、ベテラン会員の陳錫恭氏(大学の英語教授)ご自身が勉強なされた俳句の資料や新しい俳句の入門書などをわざわざ台中から送って頂き、そして自分でも日本の古本屋から必要な資料を郵便で購入し、日本の俳人で漢詩詩人でもある畏友石倉秀樹氏(漢詩を三万首以上詠んでいらっしゃる)とメールで何十回ものやり取りで俳句の本質についての議論を交わし、指導に与

かり何とか俳句に関する知識の習得に励みました。俳句の天賦の才の無い私ゆえ俳句の作品には特に提起しうる作品はありませんが、俳句事情については日本及び世界中の状態を一般の方よりは一応納得しました。特に日本の国内での事情については日本の俳句を四、五十年詠んでいる一般の方よりは詳しい事情を知り得た筈でした。日本で俳句を詠んでいる方は大まかに二つのタイプがあります、一つは俳句を詩として詠んでいらっしゃるプロの方ともう一つは趣味として俳句を詠んでいらっしゃる方(大衆化)に分けられます、で後者の方が大多数を占めています。それらの人たちは所謂伝統俳句の決まりだけが頭にこびりついて、ことごとに季語、五七五、切字ばかりを気にしており、俳句の本質については考えが及ぶことは稀でした。小林一茶をはじめ、河東碧梧桐、萩原井泉水、種田山頭火、尾崎放哉、中塚一碧楼、石田波郷、吉岡禅寺洞、加藤楸邨、日野草城、嶋田青峰、東京三、山口誓子、鈴木六林男、金子兜太、芝不器男、高柳重信らは念頭になく俳人とは認められていないようです。ことさら人間探究派や難解俳句などは相手にされません。それゆえ俳句を詠みながら俳句の本質や真髓などに思いが及び寺田寅彦、折口信夫、正岡子規、高浜虚子、長谷川權、夏石番矢らの詩論、俳論を何回か読み直しました、自然一般俳句会、結社の営為にも思慮が及びました。ある程度進みますと俳句とは瞬間

の感動を一番短い言葉で韻文に詠むことであり詠む人と読む人により読み取り方が違うのに気づき、世界の各言葉（日本語も含めて）に詠まれるためには花鳥諷詠、客観写生だけに拘らずもっと広い思惟で詠むべきだとの結論に達しました。この考えをまとめて一文にして黄先生におおくりしました。その後先生の発言で会員の方には聴力が落ちている方もいらっしゃる意見の交流が難しいこともあると聞き及び、自分のことをおっしゃっているのだと感じましたが、先生も自分もお互いに体力がままならずなかなか直接に教えに与かる機会がありませんでしたが、今年の1月の句会で下岡友加氏編集の《黄靈芝小説選2》（2015年8月出版）を手にし、その中唯一の書き下ろし文章《俳句自選百句》の冒頭で黄靈芝先生が：これらの作からもわかるように私は必ずしも五七五の定型に屈服していませんし、季語の虜になってもおりません。《そして最後に》もう一言加えたい。五七五は定義ではない。そして同じ文芸界に属する小説の世界では定型に縛られることなく、むしろ一作一作風をこそ手柄とするのではあるまいかと締めくくっていました。

まさしく青天霹靂、私は今の今まで黄先生を百分の百の伝統俳句の擁護者でありまた結社の主宰と信じていました。いや僕だけではない句会のほとんどの方がそう信じてきたのだ。私は胸を撫で下ろしました、台湾唯一の日本語俳句会の主宰で私が尊敬する師匠がああ狭い一個人の主張の伝統俳句でなく、もっと広い意味での俳句の真髓を極めていることを知り、また世界で流行っている俳句も決して全部が全部真実の俳句ではなく、日本の方々をも含めて世界の方々が真実の俳句、そして俳句の真髓を求めており、そして世界が尊重してくれている日本発想の《俳句》を日本人は大切にすべきであると言うことを心の底から感じたからだ。

黄先生の人生の最後の一文が拙文に対するお答

えであると共に先生の俳句の真髓に関する真の考えとその証左であるのだ。わたくしが拙文《台湾俳句史》で述べた如く黄先生は間違いなく俳句の真髓を極めていたのだ。過去45年間台北俳句会の主宰でありながら会員の趣味、気持ちを重んじて敢えて俳句の真髓には触れなかったのだ。其の心のやさしさを感じさせられざるを得ません。黄先生に関する一切はすでに拙文《台湾俳句史》及び《台湾俳句史補遺》に述べてあるゆえここでは控えさせていただきます。心から先生のご冥福をお祈りしています。

師の逝きて草山空の朧月

しとしと春雨に逝く靈芝師や

自信持て歩き過ぎたるこの一生

黄靈芝師はにこやかに逝く

縁

高阿香

黄靈芝先生と私とは同郷の誼で生意気盛りの中学生時代を古都台南で過した些かの縁があります。先生の従姉は私と同期ですから私の方が少し年上の筈ですが、それとは関わりなく私は文学に精魂を打込む先生を尊敬し、その厳しい御指導の下で俳句の道に励んで参りました。

不得手な会計役に選ばれた時、お断りしたら「これは誰にでも任せられる役目ではないから」と押しつけられて今日に至りました、古びて破れかけた帳簿の語る俳句の歴史は黄靈芝先生の急逝によって終止符を打たねばなりません、貧しい句会でしたが、師弟共によく頑張りました。日台交流に大きな功績を残し、数多の勳章に輝く台湾の詩聖にもう少しの時間が欲しいと残念でなりません。

台湾に不可思議な雪が降りました、80代90代の老俳人が消えても雨後の筍のように若手の俳人が続続輩出するような奇蹟が起るかも知れません。私達はそれを期待致しております。

天翔ける弥生の空は幸くあれ
仙人は気ままなものよ春うらら
あの世にて仲よくせよと花吹雪

黄靈芝先生へ弔句と弔文 黄 葉

靈芝先生の姉上陳候鳥さんが亡くなられた時遺句集に戴せる句選びのお手伝いをした事がありました。候鳥さんの家へ行きますと、もう床は一ぱいに紙かノートが散らばって置かれ、足の踏み場もない位でした。

靈芝先生はご自分も床の上に座りこんで句選びをしておられました。大きなテーブルもあるのに、それは使わないのです。聞けば生はいつも自宅の二階の畳の部屋でこうして座って仕事をしているとのことでした。黄先生はどんどん資料を床の上に拵げて行きます。その中に日が暮れて夕飯時になり、私は一旦、家に駆け戻り、そこそこに夫と食事を済ませて又仕事に戻りました。仕事は夜中に及びましたが、一人でやれば辛いことも、仲間が居れば楽しくなります。時には「こんな事が書いてありますよ」と遺稿と拵げで笑う事もありました。先生とご一緒に仕事をした事は後にもなくこの時だけの様です。先生を思い浮かべると、畳の上にあれやこれやと拵げた資料の中で、楽しそうに、というのでしょうか、悪戦苦闘というのでしょうか、そのお姿がよく浮かびます。よい一生を過されたと思います。

私達はつたない力を持ち寄って俳句を続けて参ります。先生、どうぞ天上からこの私達を見守って下さいませ。山のお家から見守って下さったのと同じ様に。敢てさようならとは申し上げません。

ふゆ
冬の降るにまかせて靈芝の喪
五色鳥啼くは亡き師をひたししの偲ぶ

北条千鶴子

台北俳句会会長の黄靈芝先生が、最後に句会に

出席なされたのは半年以上前の事になります。

ほんの短い時間椅子に坐っておられましたが、お疲れの為、間もなくお帰りになられました、大変お痩せになり歩行もご不自由とお見かけ致しました。

この度突然御逝去のお知らせに接し会員一同驚きと悲しみにくれております。台湾が誇るただお一人の天才俳人であられた先生は日本の俳句界においてもその御高名は知れわたり慕われここ数年黄先生にお会いしたい為の來台訪問者は相續いております。

まことに黄先生は台湾俳句会の産みの親であられ、いつのまにか四十五、六年の月日が流れました。会員一同も次第に高齢となり逝去の方々も相継ぎましたが、黄先生が見守って下さるこの会を大切に続けて参りました。

もう二度とお会い出来ない先生の温顔はいついづまでも天国で私共台北俳句会をお護りくださるでしょう。

先生の御恩に報いる為全員協力の下に句会を継けて行きたいと思ひます。

黄靈芝先生のみ魂よ永遠に安かれ。

忘れぬ師の温顔や鳥雲に
陽明山にもはや居ませぬ師の棲家

黄靈芝先生へ

李錦上

台湾に台北俳句会を創立し、貴重な台湾俳句歳時記を上梓なされ私共の俳句会を御指導下さいました黄先生に真心こめて12万分の感謝と御礼を申し上げます。本当に有難うございました。思へば1992年長い教職勤務を定年退職し翌年、私は東京の櫻狩短歌会を経て故王進益氏と故蕭翔文と知りあい台北俳句会に紹介してくれました。先生が私の俳句関係の日本の俳句結社や俳句主宰の先生の事をお聞きして、「句集を出しなさいよ」と再

三勧められました。遂にお別れとなつてしまいました。又高雄の故陳金蓮氏とは好友の仲で私達は古稀の後の三益友、返す返すも残念に思ふのは若しも人生の相遇の機会が少し早かったら最良の思ひ出物語りが綴られませう。月に一度だけの句会にての先生の御親切なる御指導と講評やら、國際的交流でも先生の独特なる御講義は人の心を歡悦の境地に導遊し、一流の諧謔に満ちた飾り氣の無い率直なアドリブ調には感銘の至りです。

35周年記念に先生から頂いた陶板の句額。「春光に旅立つ玩具宇宙船」これ拜讀し乍ら先生があの遠い西方の極樂聖地へお立ちになったと思へば胸熱く、先生安かれ御深悼申し上げご冥福をお祈りいたします。

春愁や台湾俳師そらをゆく
 靈芝師は俳句の字引春悼む
 榮譽滿つ台湾歳時記春光る
 漢俳に温もり残る水仙花
 矢の折れし如くに台湾の春惜しむ

黄靈芝先生と私

廖運藩

1978年4月、台北俳句会に参加させて頂き、40年近い歳月に造った俳句らしきもの約一萬、その中で靈芝先生のお目にかけて分だけでも一千句以上、但し先生の推稱を受けた作品は一句も無い、と言つても全然無視されたわけでもない。

今から30年前の拙句「水牛の角から濡れる時雨かな」には、澁澁ながら「この句には新しい發見がある」と言つて呉れたし、二十年前の俳句会出句「荒磯來て飛沫に濡るる寒の靄」、「冬の波蛇

籠を嚙んで戻りけり」、「寒燈のそれより先の野良の闇」には三句纏めて「しつかりと作句してある」と講評に書いて下さつた。更に10年前の「日脚伸ぶ鼠の額程の庭」に対し、「遂に出たぞ、好句が」と嬉しそうに煽つて呉れてゐながら、「しかしこの作者は當初猫の額の例へを使ひ、あとで訂正して來たのである。「猫の額」は過去百万遍以上使はれて來た言葉である」と嫌味をつけ足すことを忘れては居なかつた。或嘘つきの爺さんは「先生は褒めませんよ」と言つてみたが、私は信じては居ない。日本人小学校、日本人中学校で学んだ靈芝先生が、台湾人公学校そして全校の日本人生徒がたつた三人しか居なかつた私立の台湾人中学校出身の私の日本語を「物凄くうまい」と大勢の前で賞讃してくれ、又或る場面で私の客家訛の中國語を「廖さんの中國語是北京語的ですね」と妙な言ひ方で褒めて呉れてもゐるのである、尤もそれらは俳句以外の事柄であり、又私への同庚の誼からと言ふことかも知れない。

黄靈芝先生、長い間色々ありがとうございました。

靈芝逝くその如月の三日月に 御立ちあれ百病癒えし春の鶴

注釈：黄靈芝台北俳句会会長は、2016年3月12日に、享年87歳にて逝去された。4月21日の告別式では、台北俳句会員や福島せいぎ氏など日本の俳人も列席する中、日本交流協会台北事務所沼田代表や、同氏が第二の故郷と称した愛媛県松山市より野志克仁松山市長の弔辞が代読された。同氏の生前の功績、台北俳句会の活動については、2015年6月号に掲載。

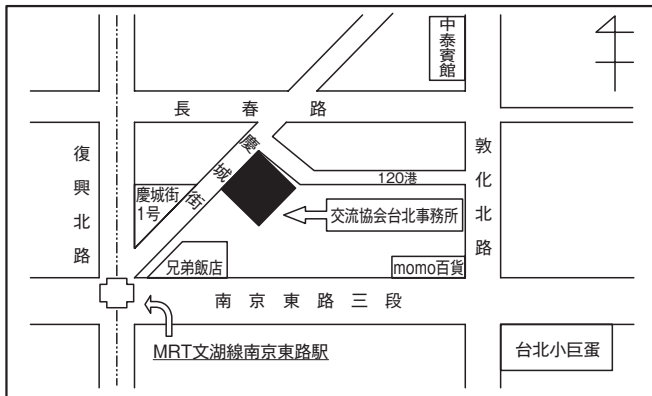
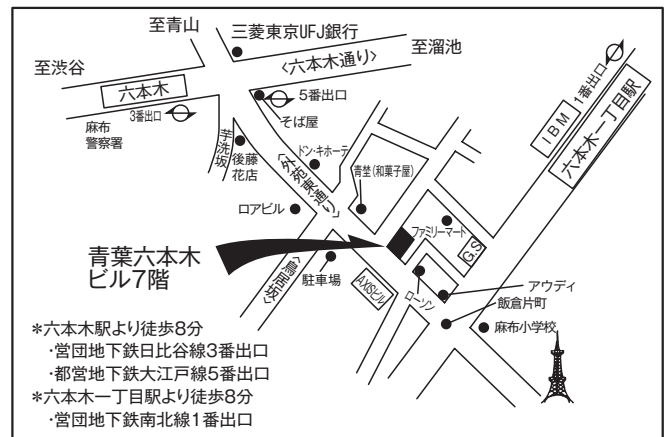
交流協会事業月間報告

主な交流協会事業（6月実施分）

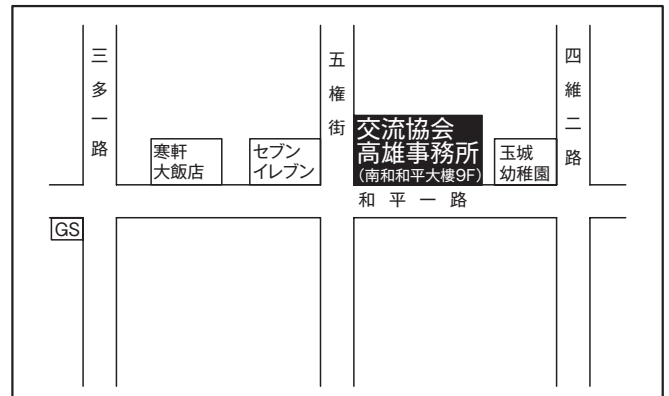
6月	場所	内容	主な出席者（日）	主な出席者（台）
1日	台中	領事出張サービス	台北事務所 小林主任	
1日～19日	台北	ZOO Alive in the ZOO 台湾写真展（後援名義事業）		
2日	85 スカイタワー（高雄）	国際青年会議所アジア太平洋地域会議開幕式に中郡所長が出席した。	中郡所長、山本樹育・公益社団法人日本青年会議所会頭他同関係者他	蔡英文総統、李大維・外交部長、陳菊・高雄市長、アジア太平洋地域の青年会議所関係者多数
3日	交流協会東京本部	理事会	浜田総務部長 他	
3日	高雄展覽館	国際青年会議所アジア太平洋地域会議期間中、日本及び各国・各地域の青年会議所関係者の交流促進を目的に開催された日本青年会議所主催レセプションに中郡所長が出席の上、来賓挨拶を行った。	中郡所長、山本樹育・公益社団法人日本青年会議所会頭他約 200 名	アジア太平洋地域の青年会議所関係者約 100 名
3、4日	台北	NHK 交響楽団台北公演	沼田代表（台北） 他	蔡英文・総統 他
4日	台北	現代日本研究学会第2回日本研究青年論壇（協力事業）	阿部専門調査員（台北）	林文程・現代日本研究学会理事長他
6日	高雄市	高雄市フィルムアーカイブにおいて、今村昌平映画監督作品集の上映に先立ち、試写会で山下次長が挨拶を行った。	山下次長他	劉秀英・高雄市フィルムアーカイブ館長他
8日	交流協会東京本部	日本研究支援委員会会合	川島真東京大学教授、松金公正宇都宮大学教授、今井理事長 他	
8日	高雄捷運股份有限公司本社ビル（高雄市）	江ノ島電鉄と高雄捷運（高雄 MRT）による観光連携協定調印式に中郡所長が出席した。	中郡所長、金野祥治・江ノ島電鉄株式会社常務取締役	郝建生・高雄捷運股份有限公司董事長、曾姿雯・高雄市政府觀光局長
9日	交流協会東京本部	謝長廷・新台湾駐日代表が交流協会本部にて着任挨拶	大橋会長、今井理事長、舟町専務理事	謝長廷・駐日代表、張淑玲・台北駐日経済文化代表事務所業務部長
12日	交流協会東京本部	評議員会		
12日	交流協会東京本部	役員候補者推薦委員会		
14日	東京	今井理事長が日華青少年交流協会総会に出席		
15日	高雄市	高雄市内に進出している日系企業と高雄市政府経済発展局長らが意見交換をする「日系企業交流座談会」にて山下次長が来賓挨拶を行った。	山下次長、高雄進出日系企業 8 社	曾文生・高雄市経済発展局長
17日	台北	日台産業協力架け橋プロジェクト「沖縄・台湾産業ビジネス対話」商談会	成田貿易経済部次長	
17日	台北事務所	2016 年前期ワーキング・ホリデー審査結果発表	山田主任	
18日	台北	中等教育日本語教師勉強会	日本語専門家（台北） 他	中等教育日本語教師
19日	台北	2016 年第 1 回日本留学試験		
19日	嘉義市	第 6 回許世賢博士慈善記念音楽会（熊本震災募金音楽会）	中郡所長夫妻他	涂醒哲・嘉義市長夫妻、黃美賢・嘉義市文化局長、張博雅・監察院院長他
21～25日	台北	Food Taipei 出品者説明会、開会式等の出展支援	花木副代表、小須賀主任、奥山主任ほか	黄 TAITRA 秘書長ほか
22日	台北事務所	若手研究者オリエンテーション	花木出副代表	周世傑科学技術部局長など
22日	台北	JETRO-TAITRA 会議 会議への出席	小須賀主任、奥山主任	黄 TAITRA 秘書長ほか
23日	内政部移民署台南市第一服務站	鈴木主任及び現地職員 1 名が移民署台南市サービスステーションにおいて領事出張サービスを実施した。	鈴木主任他 1 名	在留邦人
23日	高雄市	台湾受恩（高齢者向けスマートケアサービスを手掛ける地元事業者）と Panasonic 等複数の日系企業による「日台長期介護産業連盟」の発足式典及び、同連盟によるモデル拠点の開所式に山下次長が参加し、来賓挨拶を行った。	山下次長、Panasonic 中国法人幹部職員他	楊明州・高雄市秘書長、何美玥・同顧問、康裕成・高雄市議会議長、呂正欽・經濟部工業局副組長他
24日	台北	「日台産業協力架け橋プロジェクトの協力強化に関する覚書」に基づき九州・台湾経済交流ミッションを実施 会議・式への出席、代表・副代表による挨拶	沼田代表、花木副代表、中川九州経済連合会専務理事、大久・九州経産局国際部長ほか	林 台湾工商推進会理事長、范秘書長、蔡 亜東協会秘書長ほか
26日	国際交流基金	日本語能力試験専門家会議	土田副長	
26日	屏東県	八重山藝能・屏東藝能公演	中郡所長夫妻、宮野・八重山台湾親善交流協会沖繩支部長、八重山芸能関係者約 20 名他	吳麗雪・屏東県副県長、吳錦發・屏東県文化処処長、許天賜・屏東県議会議員他
27～29日	台北	International Customs Workshop 会議への出席	小林主任	台湾及び各国の税関当局関係者

平成28年7月25日 発行
 編集・発行人 舟町仁志
 発行所 郵便番号 106-0032
 東京都港区六本木3丁目16番33号
 青葉六本木ビル7階
 公益財団法人 交流協会 総務部
 電話 (03) 5573-2600
 F A X (03) 5573-2601
 U R L <http://www.koryu.or.jp>

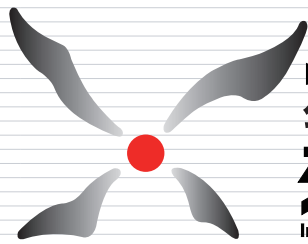
表紙デザイン：株式会社 丸井工文社
 印刷所：株式会社 丸井工文社



台北事務所 台北市慶城街28號 通泰大樓
 Tung Tai BLD., 28 Ching Cheng st., Taipei
 電話 (886) 2-2713-8000
 F A X (886) 2-2713-8787
 URL http://www.koryu.or.jp/taipei/ez3_contents.nsf/Top



高雄事務所 高雄市苓雅区和平一路87号
 南和和平大樓9F
 9F, 87 Hoping 1st. Rd., Lingya Qu, kaohsiung Taiwan
 電話 (886) 7-771-4008 (代)
 F A X (886) 2-771-2734
 URL http://www.koryu.or.jp/kaohsiung/ez3_contents.nsf/Top



日本と台湾との架け橋
公益財団法人
交流協会
Interchange Association, Japan (IAJ)

